九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「徳福一致」という「嘘」

川谷, 茂樹
北海学園大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1564235

出版情報：哲学論文集. 50, pp.123-139, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

「徳福一致」という「嘘」

川谷茂樹

本稿の主な目的は次の三点を示すことである。(一) いわゆる徳福一致説の虚構性、(二) にもかかわらずそれが一定のリアリティをもちうる理由、(三) だがそのリアリティには自ずから限界が存在すること。すなわち、「徳福一致」という「嘘」のリアリティとその限界を明らかにすることである。

一　ソクラテス＝プラトンとアリストテレス

哲学の歴史上徳福一致説が明示的に主張されたのは、プラトンの対話篇においてである。たとえば「ゴルギアス」においてソクラテスは次のように言う。

(…) 立派な善き人が、男でも女でも、幸福であるし、反対に、不正で邪悪な者は不幸である、というのがぼくの主張だからね (470e)。

道徳性を幸福な生のいわば必要十分条件とみなすこのテーゼ（「徳充足説・徳十分説 the Sufficiency of Virtue Doctrine」とも呼ばれる）は、一見穏当にみえる。少なくともわれわれにとって、善人（e.g. 正直爺さん）が幸福になり、悪人（e.g. 欲張り爺さん）が不幸になるという類の物語（因果応報説話）はごく親しい。この種の物語と徳福一致テーゼの表現上の差異は、「になる」と「である」の違いにすぎない。前者は「善人（悪人）は幸福（不幸）になる」と主張し、後者は「善人（悪人）は幸福（不幸）である」と主張する。表現上は些細なこの差異がしかし、両者の断絶を示唆する。

ソクラテス＝プラトンの徳福一致テーゼは、徳と福は無条件で一致すると主張する。善人は（その他の事柄とはまったく無関係に）それだけで幸福なのであり、悪人はそれだけで不幸なのだ。これに対して因果応報説話は、両者が結果的に一致すると言っているにすぎない。ということは、因果応報説話においては、道徳性はそれだけでは幸福を保証しない（反道徳性はそれだけでは不幸を保証しない）という前提がある。そして徳福一致テーゼはまさにこの前提を否定する。つまり、道徳性はそれだけで幸福を保証する（反道徳性はそれだけで不幸を保証する）。幸福であるためには道徳性以外のものは何も要らない（不幸であるためには反道徳性以外のものは何も要らない）。

別言すると、因果応報説話においては道徳性と幸福の関係が外的で偶然的な関係とみなされているのに対し、徳福一致テーゼにおいてはそれが内的で必然的な関係とみなされている。だから、徳福一致テーゼに従うと、善人の人生はそれがどんなに悲惨な人生であったとしても幸福な人生であり、悪人の人生はそれがどんなに満足のいく人生であったとしても不幸な人生である。このように見てくると、ソクラテス＝プラトンの徳福一致テーゼが（因果応報説話とは異なり）われわれの常識に真っ向から挑戦する、文字どおりラディカルなものであることがわかる。われわれが幸福であるかどうかを決定するのは道徳性のみであり、それ以外の何ものも関与しえない。財産の有無や人間関係や健康状態などはわれわれの幸不幸に無関係である。したがって、不幸な善人も幸福な悪人もこの世に決して存在しえない。善人は無条件に幸福であり、悪人は無条件に不幸である。だが、プラトンの弟子であるアリストテレスにおいては事情が異なる。

明らかに幸福は、外的な善をも合わせ必要とする。それというのも、必要な手だてがなければ、美しいことを行なうことは不可能であるか、容易ではないからである。すなわち、多くのことが、友人や富や政治権力を道具のようにして用いることによって行われる。また、欠けていると幸いを曇らせるようなものもいくつかある、たとえば、生まれの善さや子宝に恵まれること、美しさなどがそうである。（「ニコマコス倫理学」第一巻第八章1099a31-b3）

アリストテレスによれば、道徳性（倫理的卓越性）は幸福な生の必要条件の一つにすぎない。したがって、アリストテレスは「不幸な善人」――倫理的卓越性の点では申し分ないが身体的その他の卓越性を著しく欠くために不幸である者――の存在を認める。ソクラテス＝プラトンのラディカルな徳福一致テーゼと比較すると、アリストテレスのそれは常識的である。両者の違いが鮮明になるのは、他ならぬソクラテスの人生は幸福だったかという問いであろう。プラトンは迷いなくイエスと答えるだろうが、アリストテレスはソクラテスの人生を全体として不幸だったとみなすだろう。ほとんど冤罪とも言える罪名を着せられて死刑に処せられた人間の人生には、幸福であるために必要な外的な善が大きく欠如していたと考えざるをえないからである。次の文章はたとえそれが直接プラトンに向けられたものではないとしても、歯に衣着せぬプラトン批判としても解釈しうる。

拷問にかけられたり、数々の大きな不運に見舞われたりしている人であっても、もしその人が善き人であるなら、その人は幸福である、などと主張する人たちは、その主張が本意であるにせよそうでないにせよ、たわごとを言っているのである。（同第七巻第一三章1153b19-21）

だが、ソクラテス＝プラトンとアリストテレスのいずれにおいても、道徳性が幸福の必要条件とされている点は同じであ

る。後者においても、道徳性（魂の卓越性）は幸福な生のために最重要である。

善きものは一般に三種類に分類され、一つは外的な善、他のものは魂と身体にかかわる善だと言われているが、その場合、通常われわれは魂にかかわる善を何にもまして、最も本来的な善であると言っている。（同第一巻第八章 1098b13-15）

要するに、ソクラテス＝プラトンとアリストテレスは「不幸な善人」の存在については見解を異にするが、「幸福な悪人」の存在は一致して認めない。両者によれば、魂が劣悪な者＝悪人は、それだけで無条件に（他のすべてのものに恵まれていたとしても）不幸である。

二　ソクラテスとプラトン

ここまでは徳福一致テーゼに関してソクラテスとプラトンを区別してこなかったが、仮に区別しうるとすればどのようになるだろうか。まずプラトンにとってそれは、第一義的には理論的な吟味の対象、その正当性を証明すべき「テーゼ」であったと思われる。プラトンは生涯を賭けてこのテーゼを吟味し続けた。あるいは、プラトンの哲学的営為全体がこのテーゼから発しそこに帰するとも言えるのではないだろうか。一方ソクラテスにとっても、徳福一致は証明を要する一つの「テーゼ」であったかもしれない。がしかし同時に、それを越えるような何かでもあったのではないだろうか。つまり、ソクラテスにとって徳福一致はたんなるテーゼではなく、証明以前の端的な生の事実だったのではないだろうか。ソクラテスはこのテーゼを実際に「生きて」いたのではないだろうか。少なくともプラトンにとって、ソクラテスの生＝死は徳福一致テーゼの実

践的な（文字どおり身体を張った）証明として現出したのではないか。

徳福一致テーゼを生きたソクラテスとそれを吟味したプラトン。ここには微妙ではあるが明らかなギャップが存在する。そのことを鋭く示唆しているテキストが、プラトン最後の対話篇とされる「法律」である。プラトンはソクラテス不在のこの対話篇においても徳福一致テーゼを理論的に吟味・検討しているが、最終的にプラトンが到達したのは次のような地点である。

だが、たとえ事実が、いまの議論が明示したようではなかったとしても〔引用者注：徳福一致が事実ではなかったとしても〕、多少ともなすところのある立法者が、いやしくも若者のためによかれと思い、あえて彼らに多少の偽りを言う場合、これ以上に有益な偽りを言うことができるでしょうか。若者たちのすべてが、強制的にではなくみずからすすんで、すべての正しいことを行うようにさせうるものとして、これ以上に有力な偽りを、言うことができるでしょうか（II663d-e, 傍点強調は引用者による）。

「アテナイからの客人」のこの台詞がプラトンの真意を代弁しているのだとすれば、これはスキャンダラスな告白である。自らの生涯を賭して徳福一致テーゼを吟味し続けたプラトンは、最晩年に至ってその証明を放棄した。仮に徳福一致が「嘘」であったとしても、それは最高度に「有益な偽り」なのだからそれで「よい」ではないか（嘘も方便）という居直り。これは（プラトン対話篇における）ソクラテスにはありえない台詞であり、態度である。徳福一致テーゼが真理であろうがなかろうが、プラトンにとって最も重要なことは「人々がそれを真理だと信じている」ことなのだ。

では、人々が徳福一致テーゼを真理だと信じている状態を実現するためには、どのような条件が満たされる必要があるだろうか。そのためには徳と福が現実に一致する状態をつくり出せばよい。つまり、悪人が実際に不幸になるように（善人が

実際に幸福になるように）現実のシステムを構築すればよい。その中心的な制度は刑罰である。刑罰システムが機能している世界においては、したがって、徳と福は実際に、ある程度一致する。だがどれほど精緻なシステムを構築しても、実際には必ず抜け道がある。つまり、悪事を働いたにもかかわらず刑罰を与えられない者、不幸にならない者（徳と福が一致しないケース）が必ず存在しうる。のみならず、どれほど完璧な刑罰システムも徳と福の結果的な一致――悪人が不幸になること――を保証しうるにすぎず、そのかぎりで徳と福のあいだの原理的な透き間（不一致）がどこまでも残ってしまう。したがって刑罰システムだけでは、人々は徳と福は無条件に一致する（悪人は不幸である）と信じるようにはならないだろう。

では、徳と福がたんに結果的にではなく、無条件に一致するという現実をつくり出すことはできるだろうか。おそらく唯一の方途は、アテナイからの客人が述べているとおり教育である。つまり、悪事を働いたらそれだけで（ペナルティを与えられなくとも）実際に不幸になってしまう人間、善事を働いたらそれだけで（報酬を与えられなくとも）実際に幸福になってしまう人間をつくればよい。いわゆる「良心の呵責」をもつこの種の人間は、ソクラテス同様徳福一致テーゼを「生きている。この種の人間をソクラテス主義者と呼ぶなら、大多数の人間は多少なりともソクラテス主義者である。われわれも外的賞罰とは無関係に、悪いことをしただけで心が痛んだり、善いことをしただけで気分がよくなったりする。徳福一致テーゼがどれほど常識に反するものであったとしても、われわれがそれに一定のリアリティを見出しうる理由はこの点にある。だから、このテーゼは死なない。道徳というものが存在するかぎり生き残る。このプラトン的教育はしかし、どこまで成功しうるだろうか。節を改める。

三　なぜ徳と福は一致すべきか？

プラトンがソクラテスと同じ強度で徳福一致テーゼを「生きて」はいなかったにせよ、徳と福が一致すべきだと考えてい

たのは明白である。だが、そもそもなぜ徳と福は一致すべきなのか。「善人は幸福であるべし」、「悪人は不幸であるべし」。この「べし」を共有する者、徳と福が一致することそれ自体を「よい」と考える者をプラトン主義者と呼ぶなら、これまた大多数の人間はプラトン主義者である。われわれもプラトン同様、悪人が幸せそうに暮らしていたり善人が酷い目に遭ったりしているのを目の当たりにすると、何かが間違っている、「あってはならない」ことだと感じる。だが、もし徳福一致テーゼが正しいのであれば、悪人は無条件に不幸であり善人は無条件に幸福なのだから、この「感じ」そのものが誤りだということになる。だとすると、プラトン主義そのものは、プラトンが証明しようとした徳福一致テーゼと本質的に相容れないのではないか。

問題はプラトン主義における「べし＝よい」の根拠である。これは要するに、割が合うように（計算が合うように）すべしということではないのか。つまり、悪人が幸福であったり善人が不幸であったりするのは「計算が合わない＝わるい」。逆に、徳と福が一致するのは「計算が合う＝よい」。だとすると、ここにはどのような計算が働いているのだろうか。まず幸福はそれを享受する主体にとってプラスであり、不幸はマイナスである（これ以外ではありえない）。徳福一致とは、悪＋不幸、もしくは善＋幸福というケースである。この場合われわれは「計算が合っている」と感じる。つまり、いずれもプラスマイナスゼロだと感じる。したがって、悪＋不幸＝ゼロ、善＋幸福＝ゼロである。ということは、単純に計算すると、悪はプラスであり善はマイナスであることになる。つまり、道徳的な善は行為主体にとってはあくまでも不利益（マイナス）である、悪は利益（プラス）であるとつねにあらかじめ考えられているのだ。これが「徳と福は一致すべし」における「べし」の根拠（reason）となっている計算（ratio）である。徳と福が原理的に一致しないからこそ、両者が結果的に一致すべきだというわけである。

プラトン主義の隠れた前提として、徳福不一致（善は損、悪は得）という認識が存在する。しかもそれは徳と福が結果的に一致しない場合もあるという経験的認識ではなく、徳と福は価値として内的に相反するという認識である。プラトンもわ

れわれもこの認識をあくまでも出発点として、だからこそ、一人の人生の幸福と不幸の収支計算（損得勘定）において両者が一致すべきだと考えるのだ。以上の思考の道筋を次のように整理しうるだろう。

A　善人は不幸である。悪人は幸福である。【現実認識】

B　だがこれでは計算が合わない。【現実否定】

C　ゆえに善人は幸福でなければならない。悪人は不幸でなければならない。【理想の措定】

D　ゆえに善人は幸福である。悪人は不幸である。【嘘の捏造】

AとDが齟齬を来しており、これは全体として明らかな誤謬推論である。私は、この推論がプラトンの思考の根っこを規定していたのではないかと疑っている。いずれにしても、プラトン主義と徳福一致テーゼは理論的に両立不可能である。だが仮にそうであるとしても、プラトンはなぜCの段階、すなわち理想の措定で踏みとどまれなかったのか。ここまでであれば理論的には特に問題はない。少なくとも嘘はついていない。にもかかわらずなぜDの段階、すなわち嘘が必要だったのか。それは、理想はそれだけでは現実の人間を動かす力がないから、無力だからである。たんなるプラトン主義者にとって、徳福一致はあくまでもたんなる理想（絵に描いた餅）にすぎない。「もちろん徳と福が一致するに越したことはない。でも現実は必ずしもそうはなっていない。おそらく理想の実現は不可能だろう……」。これでは徳福不一致という現実は何も変わらない。対して、嘘には現実の人間を動かす力がある。つまり新たな現実をつくり出すことができる。プラトンの嘘によって、人々は（たんなるプラトン主義者＝理想主義者ではなく）現実にソクラテス主義者になる。徳福一致テーゼを現実に生きるようになる。徳と福が実際に一致するようになる。嘘から出た実を人為的につくり出すこと。「真理」のプラトン主義的捏造（創造）。これがプラトンの選択ではなかったか。党派的人間は必然的に嘘をつく（ニーチェ）。

だが、ソクラテスのような完璧なソクラテス主義者は現実にはいない。換言すると、プラトン的教育は最終的には成功しない。プラトン的教育の限界をいわば裏側からではあるが如実に示しているのが、「ゴルギアス」におけるソクラテスの次の議論である。この議論は、徳福一致テーゼから導出される一つの実践的な帰結（ソクラテス的応用倫理）とみなすことができる。

（…）かりにひとが誰かに対して、それは自分の敵にでもいいし、またはどんな人にでもいいが、害を加えなければならないのだとしてみよう。（…）そんなときには、その敵が裁きを受けないように、また裁判官のところへも行かないように、ひとは言行いずれの面においても、あらゆる手段をつくして、工作しなければならないわけだ。しかし、もし裁判官のところへ行ってしまったのなら、そのときは、その敵が訴訟にうち勝って罰を受けないですむように、いやむしろ、もし彼が大金を持ち逃げしていたとするなら、それを返すことなく、所持したままで、自分のためにも家族のためにも、不正に、しかも神々を無視した態度で費い果すように、またもし、死刑に値する悪事を行なっていたのなら、できることなら決して死刑にならずに、むしろ悪人のままでいつまでも死なないでいるように、しかし、もしそれができないことだとすれば、そういう人間のままで、できるだけ長時間生きながらえるように、そういうふうに取計らわねばならないのだ（480e-481b）。

悪人に刑罰を与えると悪人は正しくなり幸福になってしまう。だから、悪人を不幸にするためには、できるだけ刑罰を与えずに悪人のまま放置してどんどん悪いことをさせるのが最も効果的である。そうすれば彼はますます不幸になっていくのだから。これは、ソクラテス＝プラトンの徳福一致テーゼからほぼ論理必然的に導かれる帰結である。したがって、徳福一致テーゼにほんとうにコミットしている（それを「生きて」いる）のであれば、この結論にも自動的にコミットしうるはず

である。だが、そんな人間はおそらく皆無であろう。窃盗や殺人など何らかの不正な加害行為がなされたときにわれわれが望むのは、加害者が最低限それに見合った刑罰を受けることだろう。われわれのこの感覚を転倒させる上の結論にコミットできない者はすべて、かのテーゼにも本質的にはコミットしていない。つまり、完璧なソクラテス主義者ではない。ソクラテスが提案しているような「加害行為」はむろん人間業ではない。そのような（非人間的な）企てを「成功」させて心から満足している者がいたら、その人物はわれわれにはほとんど共感も理解も不能であるだけでなく、悪魔的にすらみえるだろう。いずれにせよ、徳福一致テーゼをほんとうに「生きる」のは、ソクラテスはともかく、われわれにはほとんど不可能である。

このことが示しているのは、われわれは（むろんプラトン自身も）プラトンの嘘によって完璧に騙されることはできないということである。おそらくこれが嘘というものの限界なのだろう。つまり、嘘は人々を完全に騙しきることはできない。したがって、われわれはせいぜい中途半端なソクラテス主義者にすぎない。われわれはある程度徳福一致を事実として生きている一方で、徳福不一致という真実を知っているし、同時にそれを生きているのである。[1]

四　カントの徳福不一致論

プラトン主義者も実はあらかじめ認めているとおり、徳福不一致こそが真実である。つまり、不幸な善人も幸福な悪人も現に存在する。これは当然すぎるほど当然であるが、[2] 同時に不快で有害な真実である。したがってそれが公共的な「真理」として承認される可能性はない。

だが、哲学の歴史においてはこの身も蓋もない真実をいともあっさり認めた人物がいる。カントである。カント倫理学の根底にあるのは、徳福不一致（より正確には徳福無関係）がこの世の真実だという認識である。そもそも、善人が幸福かど

うか、悪人が不幸かどうか、そんなことはすべて偶然に左右される経験的な事柄にすぎないのであって、どちらでもありうるしどちらでもかまわない（善悪無記）。つまり、不幸な善人や幸福な悪人がいてもそこには何の問題もない。このように道徳と幸福とを徹底的に切り離すカントは、両者が一致すべきだというプラトン主義にむしろわれわれの根深いエゴイズム（「自愛原理」）を見出す。カントによればこれまでのすべての道徳哲学はエゴイズム、すなわち損得勘定（幸不幸の収支計算）から自由ではない。だが、道徳の道徳たるゆえんはエゴイズムの否定にある。道徳を幸福の必要条件やその実現の手段という役回りから解放し、道徳を道徳として自立させること、これがカント倫理学の課題である。

カントは道徳規範の本質をその無条件性に見出す。道徳的に行為することがどのような結果をもたらすか、とりわけ自分にとって損になるか得になるかということを一切考慮してはならない。そうした計算を度外視して無条件的に規範に従ってなされる行為、それだけが道徳的価値をもつ。損得勘定に基づいてなされる行為には、それがどれほど義務にかなった（pflichtmäßig）「正しい」行為であっても、道徳的なよさはない。道徳は、幸福になりたいというわれわれの自然的欲求の度外視（消滅ではない）を命じる。この点についてのカントの議論は徹底している。それは自分の幸福ではなく他人の幸福、人類全体の幸福でも同じである。自分を犠牲にしてでも他人を幸福にしたいという「崇高な」欲求に基づく行為であったとしても、それが自らの欲求に基づいて行われたのであれば、その行為に道徳的価値はない。カントにおいては、たとえば世界平和のためになされた自己犠牲的で利他的な行為も、個人的で刹那的な快感のみを求めてなされた利己的な行為も、もしそれらが欲求に基づいているのであれば本質的な違いはない。つまり、いずれも同じく道徳的価値はない。行為が結果的に何をもたらしたのかは、その行為の道徳的評価にはいっさい関与しない。利己的であれ利他的であれ、自分のあらゆる欲求を度外視して、ただ「しなければならない」からするという「義務に基づいた（aus Pflicht）」行為のみが唯一道徳的価値をもつ。

現世の幸福については、このようにカントは徹底した反プラトン主義者である。だが、一方でカントもプラトン主義から

完全に脱却しえているわけではない。徳福一致が「よい」こと、徳と福が一致す「べき」であることをカントもまた認めているからだ。しかもカントはそのことを「最高善（das höchste Gut）」と呼んでいる。むろん、この最高善の実現はこの世では期待できない。にもかかわらずわれわれはこの現世で道徳的に行為「しなければならない」のであって、この点に道徳というものの無条件性がある。だが、カントはこの最高善の実現をあの世では期待しうると述べる。そのための条件が魂の不死と神の存在である（「実践理性の要請」）。現世では必ずしも合わない計算が来世では合うと期待しうるのである。現世における反プラトン主義者カントは、来世におけるプラトン主義者である。むろんカントによれば魂の不死も神の存在も証明不可能であるが、魂が死ぬという証明、神が存在しないという証明もまた不可能であるかぎり、われわれは来世における徳福一致という希望をもつことができる。

さて、この（慎ましいのか厚かましいのかよくわからない）希望はわれわれを道徳的行為に導く力をもちうるだろうか。われわれを実際に道徳的な人間にしうるだろうか。徳福一致の実現を保証する魂の不死と神の存在をあらかじめ信じている者でもないかぎり、どう考えても否であろう。カントの来世的プラトン主義は確かに嘘ではないかもしれないが、だからこそ現実の人間を動かしえない。プラトンの「有益な偽り」とは異なり、（道徳）教育的にはほとんど無力である。したがってカントの批判を経ても、徳福一致テーゼは決して用済みにはならない。カント倫理学はすでにあらかじめ道徳的でありたいという欲求をもっている者（ソクラテス主義者）に対して、そのためにはどうすればいいのかを教えることはできるかもしれないが、あらかじめそのような欲求を持っていない者にそれを植え付けることはできないからだ。

五　道徳教育とは何か

プラトンの「有益な偽り」が力を発揮するのは、カント倫理学が無力でしかないこうした場面である。カント的な道徳教

育は、プラトン的な道徳教育がつくりだした基礎のうえにおいてしか有効ではない。教育的観点においてはプラトンの方がはるかにクリエイティブである。カント的教育もまた、プラトン的教育の成功に依存せざるをえないからだ。道徳的な欲求そのものをゼロから創造しうるのは非カント的でプラトン的な道徳教育であり、そこで本質的な役割を果たすのは徳福一致という嘘である。そしてこの嘘がわれわれを誘惑しうる理由はカントが見抜いたとおり、われわれは誰でも幸福になりたがっているという単純かつ自明な事実（エゴイズム）に存する。徳福一致という嘘がつけ込むのは他でもない、われわれのエゴイズムである。

プラトン的教育の本来の標的は、道徳的にニュートラルである子供、未だソクラテス主義者ではない者であり、カント的教育の標的はすでにプラトン的教育によって道徳的欲求を形成された大人、すでにある程度はソクラテス主義者になっている者（「普通の人間理性」）である。そしてカント的教育が成功したら、人はカント主義者（あらゆる欲求を度外視して行為すべきだと考える者）になるのだろう。いずれにせよ人は、プラトン的教育を経由せずにいきなりカント主義者になることはできない。一方プラトン的教育が失敗に終わった場合、人は道徳的には子供のままである（ホッブズ的悪人）。この「子供」は、ただ自らが幸福になるためだけに善いことも悪いことも区別なく行うだろう。当然良心の呵責はない。この「子供」にとって道徳的行為それ自体は不利益＝損でしかない。道徳的欲求をもたない彼にとって道徳的行為の動機は、それが長期的には得になる、少なくとも損にはならない（と予想される）からであり、それ以外にない。

だとすると、「善行はめぐりめぐって得になり、悪行はめぐりめぐって損になる」という因果応報説話は、この「子供」にとってもある程度は有意義だろう。この説話の表向きの教訓は「悪いことをすると自分が損をする」ということだが、隠された真の教訓は「悪いことをしても（欲張り爺さんのような）ヘマをしなければ、それが最も幸福だ」ということなのだから。大事なのは悪いことをしないことではなく、ヘマをしないことである。そのためには処世知を含む知性が不可欠である。結果的に不幸になってしまった悪人（欲張り爺さん）に欠けていたのは何よりも知性である。愚かさこそこの「子供」にとっ

て最大の敵（悪徳）である。まさに「知は力」である。

この「子供」は因果応報説話を額面どおりに信じることもなければ、プラトン的教育に騙されてソクラテス主義者になることもない。そもそも道徳的欲求をもたないのだから、カント主義者になりようもない。この「子供」は一見道徳的怪物のようにみえるかもしれないが、われわれ中途半端なソクラテス主義者（プラトンの嘘に完全に騙されてはいない者）の内側にも依然としてこの「子供」は生きている。一度はプラトン的な嘘に騙されかけたとしてもそれを嘘だと見抜くことができるのも、この内なる「子供」のなせる業である。また、悪人を実際に不幸にすることによって徳福一致を強制的に実現する刑罰システムの存続という事実が、この「子供」が生き続けていることの何よりの証拠である。

この「子供」はそれが自分にとって有益とみなしうるかぎりで、ソクラテス主義者のふりをすることもできる。あたかも良心の呵責があるかのようにふるまうことができる。プラトンの嘘に騙されたふりをすることができる。われわれが道徳性を身につけるプロセスにおいて、つまりソクラテス主義者になるプロセスにおいてこの演技は不可欠である。この演技がまったくできない「子供」は、プラトン的教育の現場で罰を与えられ続ける（損をし続ける）からだ。ということは、われわれは今もなお演技をし続けているのではないか。われわれの内なる「子供」は、われわれの「道徳的な」身ぶりが実は演技（処世術）だと（カント的に）見抜いてしまっているのではないだろうか（自らの「道徳的な」行為がしばしば密かな羞恥の念を生み出すのはそのためだろう）。道徳的な善悪とは演技の巧拙にすぎないのではないだろうか。だとすると、道徳的な人間とは、誰よりもまずは自分自身の中の「子供」を巧みに騙しおおせることができた者であり、道徳性のために必要な素質とは何よりもまず、演技の素質である。[3] 巧く演技するためのポイントは、自分が演技をしていること自体を忘れることである。おそらくソクラテスは究極の名演を演じきって見せたのだろう。その名人芸に誰よりも魅了されたプラトンは、そこにこそほんとうの真実がある（はずだ）と確信したのかもしれない。

一方、「子供」とともに徳福不一致を認めたうえでそこから出発するホッブズやカントにとって、その「子供」はもはや瞞

着の対象ではない。ホッブズにとって「子供」は暴力による威嚇の対象である。ホッブズ的教育が依拠するのは死や刑罰に対する恐怖（パトス）である。またカントにおいては、その「子供」は無視の対象である。「定言命法」とは、内なる「子供」の要求を無視せよという命令である。だが、この命令を完璧に守っている者（完璧なカント主義者）も（カント自身も含めて）誰もいないだろう。それもまた人間業ではないからだ。万一継続的な無視に成功したとしても、ネグレクトされ続けた「子供」＝自然はいつの日かわれわれに残酷な復讐を遂げるだろう（カント的道徳教育の危険性）。

だがそれにしても、ソクラテス自身は、自らの内なる「子供」を瞞着しきる力をどこから、いかにして手に入れたのだろうか。彼だけがなぜ、完璧なソクラテス主義者たりえたのだろうか（仮にそうであったとして）。もしかすると、ソクラテスには最初から内なる「子供」がいなかった、もしくははじめから死んでいた（したがって騙す必要すらなかった）のではないか。つまり、ソクラテスはナチュラルに、完璧なソクラテス主義者だったのではないか。だが、そのような人物はわれわれにはほとんど不可解でしかない。われわれとはほとんど別の生を生きていたと考えざるをえないからだ。プラトンの努力は、決して埋めることができないこの断絶を架橋しようとするシーシュポス的な試みだったのかもしれない。

ソクラテスにとってはおそらく生の端的な事実であった、そしてプラトンが全身全霊を賭けて吟味した徳福一致テーゼは、われわれの幸不幸は何によって決まるかという問いに対して「道徳性の有無如何」という、ある種単純明快な解答を与える。だが、ソクラテスの人生はいざ知らず、われわれの人生をそのような仕方でいわば暴力的に単純化することはできないだろう。むしろ一見すると陳腐で何の変哲もない次の言葉の方が、われわれの生の真相を捉えているのではないだろうか。

不幸なことに、幸福という概念はきわめて無規定的な概念(ein so unbestimmter Begriff)である(…)。(Kant (1785), 418)

註

※プラトンとアリストテレスの著作からの引用にあたっては以下の邦訳文献を使用した（ただし一部変更した箇所もある）。

プラトン『ゴルギアス』、加来彰俊訳、岩波文庫、一九六七

――『法律（上）（下）』、森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波文庫、一九九三

アリストテレス『ニコマコス倫理学』、朴一功訳、京都大学出版会、二〇〇二

※以下の参考文献については紙幅の都合上詳しい言及は控えざるをえない。

T.Hobbes, *Leviathan* (1651)

I.Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* (1785)（アカデミー版全集第四巻）

―― *Kritik der praktischen Vernunft* (1788)（同第五巻）

天野正幸『正義と幸福　プラトンの倫理思想』、東京大学出版会、二〇〇六

岩田靖夫『増補　ソクラテス』、ちくま学芸文庫、二〇一四

加藤信朗『初期プラトン哲学』、東京大学出版会、一九八八

栗原裕次『イデアと幸福　プラトンを学ぶ』、知泉書館、二〇一三

田中美知太郎『ソクラテス』、岩波新書、一九五七

永井均『倫理とは何か　猫のアインジヒトの挑戦』、ちくま学芸文庫、二〇一一

中澤務『ソクラテスとフィロソフィア　初期プラトン哲学の展開』、ミネルヴァ書房、二〇〇七

納富信留『プラトン「理想国」の現在』、慶應義塾大学出版会、二〇一二

朴一功『魂の正義　プラトン倫理学の視座』、京都大学出版会、二〇一〇

松永雄二『知と不知　プラトン哲学研究序説』、東京大学出版会、一九九三

（1）ソクラテスのエレンコス（反駁的対話）という戦法の要は、多少なりともソクラテス主義者であるわれわれの「健全な」道徳感

覚と内なる「子供」（後述）の間の不整合を暴くことである。つまり、ソクラテス的エレンコスの成否もまたプラトン的教育の成否にかかっている。プラトンはエレンコスを叙述しつつ、プラトン的教育の成否をも同時に吟味していたのではないか。だが、対話相手（中途半端なソクラテス主義者たち）に対するソクラテスの退屈なまでの無敵ぶりも、プラトン的教育のある程度の成功を証示しうるにすぎない。

（2）先のアリストテレスの言葉を捩って言えば、家族や友人や健康や財産や名誉や美貌や才能や社会的地位など、ありとあらゆる幸運に恵まれた人であっても、その人が悪人であるならその人は不幸だなどと主張する（プラトンやアリストテレスのような）人たちは、本意であろうがなかろうが、戯言を言っているのだ。

（3）また「倫理学」とは、内なる「子供」を騙すために編み出されたさまざまな手練手管の集積ではないだろうか。

（北海学園大学・教授）